The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第三放送があった頃 ： 占領期の米軍放送WVTRの音楽番組とその影響
Author(s)	寺西, 厚史
Citation	阪大音楽学報. 2024, 20, p. 23-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98499
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第三放送があった頃
――占領期の米軍放送 WVTR の音楽番組とその影響――

寺　西　厚　史

1　はじめに

1－1　問題の所在と調査・研究の目的

本稿では、占領期の日本における米軍放送 AFRS（Armed Forces Radio Service）[1] が、日本の放送業界や音楽業界はもちろんのこと、世間一般に対しても現在からは想像できない影響力を及ぼし、その後の米国音楽の受容や、延いては民間放送誕生への気運を高める一助になったことを様々な角度から明らかにしていく。

占領期当時、放送と音楽の世界のともに内側にいた三木鶏郎が次のような一文を残している。

> アメリカの音　　―WVTR をききながら
> 「俺がラジオで放送したの、しってるかね」と友人に聞くと、
> 「知らないねエ」
> 「何だ君んところラジオないのかい」
> 「いや何時も第三放送ばかり聞くんでね」
> 　第三放送とは御存じの WVTR、国内のどこでも聞かれる占領軍の放送である。
> 「判るかね」と聞くと
> 「判らないけど、面白い」
> これは決して日本の放送は判るけどつまらないという皮肉ではない。アメリカの軽音楽が日本人の耳に再び親しまれ始めたのである。
> 《週刊ワールド・昭和 21・12・7 日号》（三木鶏郎、1954、63）

1　AFRS は当時のラジオ年鑑では「米進駐軍放送班」と訳され、一般では「進駐軍放送」あるいは「第三放送」（後述）と呼ばれていたが、本稿では AFRS あるいは【青木 2013】、【井川 2014】にならい、「米軍放送」と呼ぶ。二つの言葉を文脈によって使い分け、なおかつその東京局である WVTR という呼称も使用することをあらかじめお断りする。

また戦後 30 年を迎えた 1975（昭和 50）年 10 月に放送されたラジオ特別番組『戦後三十年　日本人を育てた歌』[2] では、ともに司会をつとめた高橋圭三と芥川隆行が「サテ、芥川さん WVTR っておぼえてますか？」「おぼえてますとも…進駐軍放送って言ってましたね。今で言う FEN ですか。」というやりとりをしている。そして、そのあと玉置宏も加わり 3 人で WVTR の「音がでかかった、音がクリアだった」と異口同音に回想している [3]。

WVTR とは、AFRS が各地で運営する放送局のうち、東京地区で電波を流しているラジオ局のコールサインのことで、少なくとも 70 年代の半ばまではある一定の年齢層には記憶されていたようである。この、英語による放送ゆえに「判らないけど、面白」かった WVTR を、本論では「再発見」し、日本における「放送」と「音楽」の二つの流れのなかで、その存在感や影響力を検証していく。

日本における米軍放送の研究といえば、【難波功士編『米軍基地文化』2014】や最新のものとして【塚田修一「米軍基地文化としての米軍ラジオ放送 FEN：音楽関係者の聴取経験と実践を中心に」2021】などがあるが、共に主たる関心は日本独立後、米軍放送が FEN と呼ばれるようになってからの、米軍基地およびそれが生み出す文化状況にあり、音楽的にもロックン・ロール以降が対象で、占領期の放送はその前段階として重要性は指摘しながらも周辺的に語られている。

占領期の放送を真正面から捉えた研究としては、【細川周平「歌う民主主義―『のど自慢』と陳腐さの効用」2003】が知られているが、当然というべきか、民主主義の受容という大テーマを NHK[4] のラジオという場で考察している。米国の先進的ラジオ放送についての言及もあるが、米軍放送までは対象とされていない。

さらに敗戦直後の日本での米国音楽の受容に関する研究も【東谷護『進駐軍クラブから歌謡曲へ　戦後ポピュラー音楽の黎明期』2005】、【青木深『めぐりあうものたちの群像　戦後日本の米軍基地と音楽』2013】、【君塚洋一『選曲の社会史―「洋楽かぶれ」の系譜』2018】など多くの蓄積がある。ただ総じて実演の観点からの研究で、占領期の米軍放送に関しては、（【青木 2013】を筆頭に多くの言及があるものの）周辺的存在で、散発的な記述にとどまっている。

管見の範囲では占領期の米軍放送を主題として扱った数少ない文章として【井川充雄「コラム　米軍放送　占領期の WVTR」2014】がある [5]。井川はこのコラムの中で、本来のリスナーである米兵以外に電波が「越境（スピルオーバー）」し、その結果「蔭のオーディエン

2　日本民間放送連盟制作として幹事局のニッポン放送が担当した特別番組で、「'75 全国民放ラジオ統一キャンペーン」（この年が第一回）として全国 53 局（当時）で同時放送された。多くの有名歌手をゲストに迎え、戦後のヒット曲の中から厳選された 30 曲を披露しようという企画だった。

3　放送内容は番組進行台本（国立国会図書館デジタルコレクション）と個人蔵の音源で確認した。（確認日 2023 年 8 月 26 日）

4　「NHK」という略称は 1946（昭和 21）年 3 月以降使用されるようになったものとされるが（岡部、2020、243）、本論ではそれ以前の時期を含め「日本放送協会」はすべて「NHK」と表記する。

5　米軍放送を主題としたものではないが【三井 2018】は WVTR の逸話を多く紹介している。特に敗戦直後の NHK の放送内容を WVTR のそれと比較するなど、興味深い記述が見られる（三井、2018、21-23）。また WVTR 放送初日の記述に関しては後述する。

ス（shadow audience）」が生まれたと指摘している（井川、2014、179）。この「蔭のオーディエンス」が「蔭」と呼びうる単なる周辺的存在であったのか。本論では現在の日本人の平均的記憶よりは米軍放送 WVTR がより大きな存在で、より多くの日本人がその影響を受けたという事例を提示していく。

１－２　調査の方法

調査は当時の新聞のラジオ番組欄や番組紹介記事を中心に行った。WVTR に関しては米軍が米兵のために発行する英字新聞『Pacific Stars & Stripes』（1945 年 10 月 3 日創刊）[6]―以後引用時は（S&S）と略記―や『世界日報』（1946 年 8 月 15 日創刊）、読売新聞を中心に調査した。『世界日報』は国際ニュースを中心に紙面を編集、ラジオ番組にも多くの紙面を割き、WVTR の番組表をいち早く掲載するなど、全国紙と一線を画していた[7]。『読売新聞』は戦前、ラジオ放送開始後即座に「ラジオ版」を紙面に設けるなどラジオ放送の紹介に熱心で、WVTR の番組表に関しても『世界日報』に遅れること 5 か月、1947（昭和 22）年 1 月 15 日から掲載している[8]。

一方大阪地区の WVTQ の掲載に関しては、大阪毎日新聞が 1948（昭和 23）年 11 月 1 日から、また大阪朝日新聞は 1949（昭和 24）年 1 月 1 日からで、東京地区とは著しく差があり、番組表の充実度も劣る。

２　米軍放送 AFRS の設立

２－１　AFRS 設立の経緯

進軍ラッパや軍楽隊が象徴するように、音楽は軍隊の士気を鼓舞するために古くから利用され、米軍はとりわけ熱心にその効用を研究した。そして第二次世界大戦においては、従来のように、勇ましいマーチや愛国歌謡で軍隊の一体感を高めることより、個々の兵士がそれぞれの好みに合った楽曲を通じて過酷な戦闘からの気分転換をはかったり、癒しや慰めを求めたりしていることを悟った米軍は、1940（昭和 15）年に士気高揚部門（Morale Branch）にラジオ・セクションと音楽セクションを設け、その対策にあたる（君塚、2018、173-175）。

ラジオ・セクションは国内でラジオ・音楽業界へ働きかけ、放送音源となる、多くの兵士の趣味に合う音楽の録音作業を急ぐとともに、国内基地や海外戦線での中波ラジオの開局を進める。そして 1942（昭和 17）年 5 月、アラスカ駐留兵士のための軍隊内ラジオ局として

6　『Pacific Stars & Stripes』に関しては（青木、2013、575）に詳しい注釈がある。
7　芥川賞作家の堀田善衛はかつて世界日報に勤務しており、堀田によると世界日報は同盟通信社の旧外国特派員だけでつくった新聞だった。堀田はジャズも知らないままに WVTR の放送プログラムの解説を書いていたという。（青春と読書、1991、23）
8　【井川 2014】によれば、継続して掲載が始まるのは 2 月 2 日となっているが、紙面では 1 月 15 日からの連載が確認される。ちなみに東京朝日新聞は同年 4 月 16 日から、東京毎日新聞は同年 5 月 1 日からの連載である。

AFRS が誕生する（井川、2014、178）。

一方の音楽セクションは、音楽業界の全面協力のもと、第二次世界大戦中から戦後期の 1943（昭和 18）年から 1949（昭和 24）年にかけて、ヨーロッパやアジア・太平洋地域など米軍が進駐するほぼすべての戦地の兵士たちに送られた、当時のヒット曲を中心とした「V ディスク（V-Discs）」と呼ばれる総計八百万枚以上に及ぶアナログ・レコードのシリーズを企画立案して供給する（君塚、2018、173）。

AFRS と V ディスクが共に戦線の兵士たちに届けた主たる音楽である「スウィング・ジャズ[9]」が「アメリカ国民の音楽」、「アメリカ民主主義を象徴する音楽」（モラスキー、2005、26）であったことを考えると、米軍の士気高揚部門が生んだ AFRS と V ディスクは兵士たちに単に癒しや慰めを届けただけではなく、従来通りの「軍隊の一体感」や「愛国心」を供給したといえるかもしれない。

２－２　AFRS の日本上陸

1942（昭和 17）年５月、アラスカから始まった AFRS は米軍の戦線拡大とともに拡張を続け、1945（昭和 20）年７月、組織的な地上戦が終了した直後の沖縄で開局、その後日本本土占領後、東京地区においては内幸町にあった NHK 放送会館のかなりの施設を接収し、第二放送を供出させるかたちで[10]、1945（昭和 20）年９月 23 日ラジオ放送を開始する（井川、2014、178）。当日の読売新聞朝刊は「ラジオ　第三放送を開始　第二放送は進駐軍慰安に提供」という見出しでこれを報じ、また９月 25 日の東京毎日新聞は、受信機は米軍兵士五十人に一個の割合で配給されると伝えている。

ただ既存の第二放送を米軍放送に割り当て、（第三の）新規の電波を従来の第二放送としたため、新聞などのメディアにおいては、しばらく表記に混乱が生じる。一例として大阪毎日新聞、1945（昭和 20）年 10 月７日付朝刊を見ると、放送（ラジオ）欄に【第一放送】、【第二放送】（進駐軍用）、【第三放送】と並べて表記し、【第二放送】の内容として、

9　スウィング・ジャズの概説については（輪島、2013、102-103）を参照のこと。

10　NHK 第二放送の供出によって日本における米軍放送が始まったことは、当時の新聞報道やその報道記事に基づく先行研究によって定説とされていると考えてよい。ところが今回閲覧した『Pacific Stars & Stripes』紙に記載された WVTR の番組表にある周波数は創刊日の 1945 年 10 月３日から翌 1946 年９月 29 日まで NHK 第一放送の周波数である 590KC と表示されており、翌 30 日から第二放送の周波数になっている。『Pacific Stars & Stripes』紙の記載内容が事実だとすれば、WVTR の放送開始以来およそ一年間に亘って NHK 第一放送の周波数が使用されていたことになる。しかし管見の限り当時の新聞報道には周波数の変更に関する記事はなく、そもそも日本の新聞のラジオ欄には元々周波数の記載がない。当該年度分の『NHK 年鑑　昭和 22 年版』にも AFRS の記述はあるものの、周波数や第一第二放送との関係には全く触れられていない。後年の『日本放送史』には「中央放送局の第二放送用装置を転用して（中略）駐留軍向け放送を開始」（日本放送協会編、1965、789）とあるのみである。また気になる言説として「進駐軍放送のために第２放送の施設の提供が求められたのである。東京（870kHz）、大阪（940kHz）、名古屋（990kHz）がこれにあたる。ところが、1945 年９月 23 日に開始された東京の AFRS 放送では、第一放送の周波数 590kHz が使用されていた。これはアメリカ太平洋軍総司令部の命令だと言われる」（京滋ミーティング、2016、web）との文章も見られる。周波数は一般的に低位のほうが干渉を受けずに安定しているとされるだけに良質の周波数をお膝元の東京分として米側が要求した可能性は十分ありうる。『日本放送史』の「第二放送用装置の転用」が必ずしも「第二放送の周波数の使用」を意味しないというレトリックが成立するのかも含め、今後の検証課題としたい。

◇前７・00 聖楽◇８・00 絃楽◇８・30 朝の音楽◇ 11・30 音楽◇ 12・00 セレナーデ◇後３・00 陸軍軍楽隊◇４・30 ニューヨークシンフォニー◇６・15 スポーツの話◇７・30 演芸各種◇９・30 アメリカンアルバム

と米軍放送が紹介されている。ところが翌８日では【第三放送】として米軍放送が記載され、10 月９日の放送欄でも【第三放送】が「（英語）進駐軍用」と注意書きされたうえで、

◇前 11・00「日本語を話しましょう」◇ 11・30 交響楽と合唱―グレッド・ワーリング交響楽団◇ 12・30 職業野球実況放送―シカゴより―◇ 18・15 セレナード◇ 18・30 グレート・モーメント・ミュージック◇ 19・30 交響楽―ホーヂーカーミカル楽団［ホーギー・カーマイケルか＝筆者註］

と米軍放送の内容が記述されている。そして 10 月 10 日には【第一放送】と【第二放送】のみで【第三放送】の記載がなくなり、翌 11 日は【第一放送】と【第二放送】の記載の後に「進駐軍向け放送」の説明記事を載せ、「進駐軍向専用の第三放送（940KC）［WVTQ の周波数：筆者註］は毎日六時半より二十三時まで（中略）その番組は７・30、12・15、18・00、22・00（ニュース）（中略）等が定時放送で他の時間は全部音楽となっている」と伝えている。この大阪毎日新聞の 1945 年 10 月７日～９日の放送欄は、三日間のみではあるが米軍放送の番組をどの新聞よりも早く記載した事例といえる。

２－３　WVTR の実態

以上のような経緯もあり、AFRS の日本各地のラジオ局は当初一般市民から進駐軍放送あるいは第三放送と呼ばれていた。そのうちの東京局 WVTR に関して昭和 22 年度のラジオ年鑑は次のように要約している。

放送会館の専用スタジオから、ロサンゼルスの本部より空輸される録音盤を中心に、ニュース・音楽・実況その他日本国内からの中継や将兵達によるナマの音楽演奏等午前六時半より午後十一時まで一日十六時間半に及ぶ多彩の楽しい慰問放送を実施している。（日本放送協会、1947、19）

「ロサンゼルスの本部より空輸される録音盤」とは「ブロードキャスト・トランスクリプション」と呼ばれる、16 インチの LP と同じビニールにプレスされたディスク（ただし再生用のレコード針は LP より太い）で、33 回転で片面 15 分録音できた（宇尾、2019、Web）。毎週一週間分米国より空輸されてくる、この録音盤の内容は主に当時アメリカ本国で人気を

博していたラジオ番組が中心だが、ロサンゼルスの AFRS 本部が独自に制作した番組も含まれる（山本編、2009、175）。

ニュースに関しては、ロサンゼルスからの短波放送を生中継する時間帯（15 時と 20 時）とアメリカ三大通信社である AP、INS、UP から供給されるニュース素材を東京で編集し放送する時間帯の二種類があった（石原裕市郎、1949、25）。また「日本国内からの中継や将兵達によるナマの音楽演奏」については音楽のジャンルを問わず、日本人ミュージシャンによる米軍人用慰安施設からの実演が数多く生中継された[11]。

放送業務は放送会館四階の第２、第 15 スタジオを専用して少人数の GI によっておこなわれたが、放送以外の電波の送出や機器の保守点検等の技術的作業は NHK の技術職員が担当した（科学朝日、1947-７、17）[12]。当時、なんらかの形で米軍放送に携わった日本人技術者は前述のブロードキャスト・トランスクリプションをはじめとする米国の高度な録音技術や、日本にはまだない RCA77D、44BX、BK ５などの最新鋭の高性能マイクロフォンに目をみはった（宇尾、2019、Web）。

音楽番組以外でも、NHK が「話の泉」や「二十の扉」という題名で日本語版を制作し大ヒット番組となった「インフォメーション・プリーズ」や「トゥエンティ・クエスチョン」らのクイズ番組も AFRS で放送された（竹前・中村監修、1997、22）。また 1945（昭和 20）年 10 月８日から、月曜－日曜午前 11 時の時間帯で「レッツ・スピーク・ジャパニーズ」という日本語会話番組も放送されている（S&S）（４頁の 10 月９日付大阪毎日新聞参照）。

ジャーナリストの磯部佑一郎は受験生のための雑誌の中で WVTR の番組を朝から夜まで時間順に紹介しているが、早朝６時 15 分から６時 45 分放送の「Rise and Shine Man」について、この番組はジャズ音楽を聴かせる番組だが、「ジャズを聞かせることと、正確な時間を知らせる目的らしく（中略）また Get up! と三、四回一段と声を高めて呼んで audience の眼を覚ませようとする」（磯部、1949-９、65）と驚きをもって観察している。それ以前およびその時点での NHK のラジオがいかに堅苦しい放送をしていたのか、逆に WVTR の番組が英語とはいえ、いかに新鮮なものとして日本人の耳に届いていたかがよくわかる。

ところで東京地区 WVTR と大阪地区 WVTQ の番組表を比較すると[13]、かなり番組編成に違いが見られ、ネットではなく各地区の放送局はブロードキャスト・トランスクリプションを独自に、あるいは順番待ちして入手し、その放送局独自の番組編成をしたものとおもわれる。東京の WVTR をキー局として番組をネット送出しなかったのかという点については、「有線中継網が戦災でズタズタに切れており、当面はローカル運用と本国からの録音盤の放送が

11　その実例については【青木 2013】に詳しい。
12　人件費を含む米軍放送の経費は、他のあらゆる米進駐軍の日本占領に関わる費用と同様に「終戦処理費」（その中の「軍情報費・放送費」という科目）で日本政府が負担した。（占領調達史編さん委員会編、1955《第２》、50）
13　前述のとおり、大阪地区の AFRS の番組表は 1948（昭和 23）11 月までなく、しかもその詳細度は東京地区に劣り、比較検証は不完全なものになると言わざるをえない。

中心」（まえさき「AFRS 進駐軍放送」Web）だったとの証言がある。

そしてラジオから流れるアナウンスは一様に陽気で「多勢の笑い声や拍手やピューピュー―という口笛が受信機からあふれて」きた（石原裕市郎、1949、22）。WVTR のアナウンスに笑い声が多かったとの証言は後述するが、数多くあった。

２－４　WVTR 放送開始当時の NHK のラジオ放送

笑い声や歓声に満ちた WVTR とは対照的だったのが敗戦直後の NHK のラジオだった。昭和 22 年度の（NHK）ラジオ年鑑には「音楽一切を止めていた。不幸の際に音曲をとめる国民感情から来る習慣に常識的に従ったまでであるが、これを何時如何なるキッカケで、又どのようなものから復活するかと云うのが大きな悩みであった。」とあり、８月 22 日の夜になって、朗読を放送したが「いつまでも通夜の様な状態を続けるいわれはない」ので、23 日朝にラジオ体操、夜はニュースのあとに琴の古曲を放送、８月 24 日夜には「唱歌集」を編成し、「ウサギと亀」や「金太郎」を放送する。音楽らしいものの最初の番組だっただけに広く聞かれたが、戦争に負けたからこども扱いするのかという非難もあったという（日本放送協会、1947、22）。

このような NHK の試行錯誤を見る限り、９月 23 日に放送を開始した、英語のアナウンスといえども笑い声に満ちた WVTR の放送は日本における敗戦後初の「楽しい放送」といえるものではなかったか。

３　WVTR の音楽放送

英語による放送にあってもとりわけ音楽放送は、英語を解さない日本の聴衆にとってより身近なものだったと思われる。その音楽放送の実態を WVTR の番組表などからみていく。

読売新聞が紙面に WVTR の番組表の連載を開始するにあたって、1947（昭和 22）年１月 17 日、18 日の二日間「WVTR のきき方」という記事を掲載した。

> WVTR のきき方１
>
> ▽…WVTR は東京・横浜地区進駐軍向放送だが番組の大部分は録音でアメリカから空輸されて来るのでアメリカ国内の大放送網の最高プロをわれわれは居ながらにして聴くことが出来るわけだ。
>
> ▽…いちばん豪華プロの多いのはやはり日曜午後二時からのホリウッド・ボール音楽祭実況、ストコフスキーはじめ最高級が続々出演。その夜は同じホリウッドから一流のスウィング・ジャズ、九時からの「コンマンド・パーフォマンス」（最高の演芸）は最近封切の映画俳優が出る。

WVTR のきき方２

▽…WVTR はどの日も豪華プロの連続だが、クラシックの好きな人は水曜と金曜の夜八時、NBC、CBS フィラデルフィア等の交響楽団。スイート・ソングの好きな人は木曜と金曜の夜、シナトラやビン(ママ)・クロスビー等の人気歌手がずらり、いま世界の先端を行くスウィング・バンドは毎日朝八時十五分の「魔法のじゅうたん」十時五分の「スウィング・アルバム」夜十時十五分の「スポットライト・バンド」この時間にはゼビア・クガーやハリー・ジェームス等が悩ましきブルースを送る。

米軍放送といえばジャズ、というある種の先入観を覆し、クラシック音楽の存在感と高い人気が感じられる。

３－１　WVTR のクラシック音楽放送

戦間期に、アルトゥーロ・トスカニーニ、セルゲイ・クーセヴィツキー、ブルーノ・ワルター、ベーラ・バルトーク、レオポルド・ストコフスキー、ユージン・オーマンディら多くの世界レベルの音楽家が、戦火や人種迫害を逃れるために欧州から米国に活躍の場を移していた。その影響で 1930 年代以降いわゆるクラシック音楽が米国において大衆レベルで人気を博していた（ジェラット、1981、225）。

その人気を反映して WVTR でも多くのクラシック音楽の番組が放送された。『音楽芸術』、1946（昭和 21）年 10 月号に掲載された、音楽評論家、松本太郎による「海外音楽情報 WVTR 東京の交響曲放送」という記事を見てみる。

記事の冒頭「進駐軍向けの WVTR 東京の放送網が殆ど終日音楽を放送して居る事は誰でも知って居るが、週に三回日を定めて交響楽が放送されて居る事は案外知られて居ない」と述べたうえで、放送内容を記述している。

週に三回の交響楽放送とは、主に、トスカニーニ指揮の NBC 交響楽団、クーセヴィツキー指揮のボストン交響楽団、ロジンスキ指揮のニューヨークフィルハーモニックによって演奏されているもので、時にはオーマンディのフィラデルフィア・オーケストラが登場することもある。そのほかボストン交響楽団の客演指揮では当時 28 歳ながら全米第一の人気者のレナード・バーンスタイン、またニューヨークフィルハーモニックの客演指揮者としては、自作曲を指揮したストラビンスキーやブルックナーの第九交響曲などを指揮したブルーノ・ワルター等が登場した（音楽芸術、1946、50-51）。

全般に曲目は日本の場合より種類が多く変化に富んでいて、日本であまり演奏されないバッハ、ワグナーがかなり演奏され、近代曲、現代曲ではラフマニノフ、シベリウス、プロコフィエフ、シェスタコヴィッチがよく出てくると伝えている。

３－２　WVTR のポピュラー音楽放送

WVTR の放送実態は本国のポピュラー音楽の潮流とどのようにかかわっていたのか。

この時期米国では 1940 年代前半から、チャーリー・パーカー、ディジー・ガレスピーらによってビバップと呼ばれる、即興演奏を主体としたコンボ編成によるモダン・ジャズへの革新が進んでいた（君塚、2018、99）。

そして楽団がフルバンドからコンボ編成へと移行することで、スウィング時代にどの楽団にも存在した専属歌手が独立していく。その代表例として、フランク・シナトラは 1942 年９月にトミー・ドーシー楽団を離れソロ活動にはいり、すぐにビング・クロスビーをしのぐ人気を得た。シナトラの成功が刺激となり、ダイナ・ショア、ペリー・コモ、ジョー・スタフォード、ペギー・リー等人気専属歌手が次々と独立しソロ歌手の時代が到来する（三井ほか、2000、78-80）。

また第二次世界大戦による軍需産業への就業などの人口移動で、戦前は地域的現象であったヒルビリー音楽が全米各地に広がり全国的人気を獲得し（三井ほか、2000、77）、1950 年代はじめにはカントリー＆ウエスタンという呼び名で、ポピュラー音楽界の主流としての地位を固めるに至る（三井ほか、2000、96）。

当時米国本土のラジオ放送では、人気のある主要なダンス・バンドを目玉にし、全米各地の大規模なダンス・ホールや高級ホテルからの実況ナマ中継放送を売り物にしていた（ピーターソン、2006、145）。「ワン・ナイト・スタンド」「スポットライト・バンド」「ジャスト・ジャズコンサート」等のこれら人気番組はそのまま録音されて WVTR の番組ラインナップに加えられている。

ただ、「大多数の進駐軍関係者に受けがよかったのは、たとえばグレン・ミラー楽団のようなビッグバンドによる、大編成のアンサンブル向けにきっちりと編曲された甘く軽快なスウィング･ジャズ」（君塚、2018、99）だったので、米本土よりはビバップへの移行がおそく、前述グレン・ミラー楽団以外にもベニー・グッドマン、トミー・ドーシーなど 30 年代が全盛の楽団も高い頻度で登場した。

また先ほど列挙した専属歌手から独立したソロ歌手たちはフランク・シナトラを筆頭にほとんどが番組のレギュラー出演者として WVTR に登場した。

つまり WVTR の放送する音楽は、最新の音楽的潮流を紹介するというより、当時すでに親しまれていたものが中心だったといえる。ただその中においても「ジュビリー」、「ダウンビート」などの番組では最新情報として単発的に、そして後発番組（1948. 8.28 スタート）のジーン･ノーマン解説による「ジャスト･ジャズ」あたりから継続的にビバップが紹介され始める。

また 1925 年からナッシュビルのラジオ局 WSM で放送されているヒルビリー／カントリー＆ウエスタンの登竜門番組「グランド･オール･オプリー」も WVTR の番組表に見える（S&S 1946.２.２）。

３－３　WVTR の音楽放送の実際

1945（昭和 20）年

註５で述べたように、三井徹は『戦後洋楽ポピュラー史　1945-1975　資料が語る受容熱』（NTT 出版、2018）の数多くの箇所で WVTR に関して触れている。そのこと自体 WVTR の重要性の証といえるが、その中でも注目すべきは、1945（昭和 20）年９月 23 日、WVTR 開局初日の最初に放送された楽曲が何であったかに関心を抱き、調査した箇所である。WVTR から放送された音楽が戦後の日本人に与えた影響力の大きさを十分認識していたがゆえに、最初に放送された楽曲に象徴的意義を見出そうとしたといえる。その結果、『戦後史大事典』（三省堂、1991 年）の志賀信夫の記述や花輪如一著『ラジオの教科書』（データハウス、2008 年）に基づき、典拠はないものの、開局初日の最初の曲が「煙が目にしみる」〈Smoke Gets In Your Eyes〉であった可能性を指摘している（三井、2018、21-22）。

この日にはまだ日本で『Pacific Stars & Stripes』は刊行されていないが、当日の東京毎日新聞のラジオ欄によると、NHK の第三放送（この日始まる米軍放送を第二放送として、従来の JOAK の第二放送を第三放送としている）の午後７時から「日米交歓放送音楽会」という番組が編成されている。この番組の第四演目として「４、吹奏楽　マッカーサー総司令部配属第 233 部隊楽団」との記載があり、この楽団は前述した『ラジオの教科書』にある「アメリカ軍第 233 隊吹奏隊」と一致すると思われる。こうした日時や演奏者の一致から、WVTR と JOAK の第三（第二）放送が同じ音楽イベントを２つの電波で同時生中継したことは間違いないとおもわれる。９月 25 日付東京毎日新聞には「日米交歓音楽の夕」と題された記事があり、前々日の音楽会の様子を伝えている。

> 放送会館三階の大スタジオの正面にアメリカ兵の楽団と日本の音楽家達が仲よく並んでいる、手前の方にはこれもアメリカの将兵と放送局の幹部を初めお嬢さん達まで二百名近くが肩を並べて日米渾然一体お互いにあまり言葉は通じないながらもニコニコと聴いている、二十三日夜七時四十分から催された日米交歓放送音楽会の雰囲気である
>
> アメリカ側はマッカーサー総司令部配属第二百三十三隊楽団、隊長はウォークマン准将、サンディー軍曹指揮による出演である。日本側による室内楽、合唱、ピアノ独奏についで元気一ぱいのアメリカ兵の演奏が始められトランペットを吹きピアノやセロ[14]やアコーディオンを弾く兵士達の顔は音楽を楽しむ喜びに充ち明るいジャズ風の曲目九曲の演奏が嵐のような日米入り乱れた拍手の中に終わる
>
> 再び日本側の弦楽四重奏、独唱管弦楽等があって和気藹々裡に午後九時終了した

14 「セロ」となっているのは、「（ウッド）ベース」のことであろうか。

この記事からは米側が演奏した曲目に関しては「明るいジャズ風の九曲」としかわからないが、NHK の確定表[15] の９月 23 日の項によると、JOAK の第二放送で午後７時の時報に引き続き「日米放送音楽会」が放送されている。最初の演目は「軽音楽」で松本新室内楽団の演奏だが曲目は判読できない。第二演目は「合唱」で東京放送合唱団が、「フォスター民謡集」を歌っている。第三演目は和田肇による「ピアノの独奏」となっているが、曲目は判読できない。このあと第四演目で米側が登場する。演目名は一部しか判読できないが「吹奏楽」と推定できる。演奏はマッカーサー総司令部□□第二百三十三隊楽団、楽長ウォークマン准□、指揮サンディ軍曹とあり、新聞記事と一致する。そして曲目のみ、おそらく後日挿入されたかたちで次ページにつぎのように記載されている。（原文は縦書き）

一　主題
二　暗闇に踊る
三　空想（独唱）
四　ロザリー
五　おどけたこと（トランペット独奏）
六　作品五百番
七　御意のままに（独唱）
八　碧空
九　夕星
十　日当たりの良い舗道

〈Smoke Gets In Your Eyes〉と思われる曲はここにはないが、唯一可能性があるとすれば一曲目の「主題」で、これはジャズのビッグバンドなどによくある、そのバンドのテーマ曲のことと思われ（前述の毎日新聞も全９曲として一曲目を数えていない）、この楽団の主題、つまりテーマ曲が〈Smoke Gets In Your Eyes〉だとすれば、それが最初に WVTR の電波に乗った曲ということになる。この件は今後も引き続き調査を進めたい。

1946（昭和 21）年

敗戦一周年の８月 15 日、世界日報が刊行される。初日から文化面で NHK と WVTR に番組表、聴きどころとも、互角に紙面を割いている。NHK の聴きどころは、第一放送午後７時 30 分からの「トルーマン大統領の日本国民へのメッセージ（録音）」であり、WVTR は

15　確定表とは、NHK がラジオ放送終了後に放送内容を記録した資料（寺西、2023、24）。ちなみに確定表では WVTR の放送開始以降も一貫して、第一放送、第二放送と記載されており、WVTR に関する記載は一切ない。なお９月 23 日の当該箇所は確定表の保存状態が悪く、判読不明の箇所が少なからず存在する。

午後８時45分、アーニー・パイル劇場（東京宝塚劇場の接収後の名前）からの中継で、「歌劇　ミカド」と伝えている。

また８月20日の聴きどころでは「皆様おなじみのビング・クロスビーがおひる０・30三十分間歌いまくります」と書き、８月25日には「后２・00からは日比谷公会堂で進駐軍のために演奏する日響の音楽を中継する　これは指揮がローゼンシュトックであり楽員も聞き手が進駐軍なので緊張しており、いい演奏ぶりを示している」など随分とざっくばらんとした書きぶりである。同様に10月１日にも「WVTRから」という聴きどころの欄でも「十時十五分からのハリー・ジェームスのスポットライト・バンド、このスポットライト・バンドをまだ聞いたことのない方は是非毎晩十時十五分にチューンなさい、NHKの国内放送が終わってからゆっくりとWVTRをたのしみましょう」と記している。当時NHKの放送は午後10時で終了するので、その時刻以降は雑音も少なく、良質の音でWVTRが聴取できたものと思われる。

さてWVTRへの注目を高めた一つの要因として、この年に起こったNHKのストライキが考えられる。10月６日、前日に予定されていた新聞通信放送労働組合のストライキ（新聞ゼネスト）が回避されるなか、NHK支部だけが単独でストライキに突入、NHKはニュース等一部放送以外の番組を全面的に休止する。これをもって日本本土で放送される電波メディアは各地区の米軍放送のみ、東京地区ではWVTR一局のみとなる。この事態に伴い、一般各紙も一斉に新聞ラジオ欄の掲載を中止する。そんな中で世界日報は通常のラジオ欄の紙面（２面の下半分の３分の２程度）をすべてWVTRの番組表および聴きどころの記事で埋める。

10月６日のラジオ欄の見出しで「ラジオ版　素晴らしい進駐軍放送　日曜日で特に豪華なプロ」と謳い、午前から夜の最後の番組まで曲目まで記入しながら詳しくその内容を伝えている。たとえば午後の番組では、「ストコフスキー　後２・00ホリウッドボール　ストコフスキーの指揮でワグナーのものをやる予定、その録音は今太平洋を東京に向けて空輸中で、きょうのお昼には放送に間に合います」と紹介されている。ちなみにこの「（録音素材が）現在、東京に向け空輸中で、放送時間までには間に合う」という表現は最新の音楽演奏を聴取者に届けていることを強調するためかしばしば用いられるが、実際大量のブロードキャスト・トランスクリプションが録音され次第、頻繁に日本に向けて空輸されている現状があったと思われる。

10月８日には人気番組「ワンナイト・スタンド」の記事があり、「米国の歌謡曲　午後五時三十分　ワンナイト・スタンド　毎日進駐軍プロの呼物『ワンナイト・スタンド』とは町から町へ、村から村へ巡回しながら村の人たちと共に唄うバンドで、今日のワゴンは加州バークロイのクラモントホテルの前でやります、指揮ディック・ジュルゲンでジミ・キャッスルが主に唄います　曲目はいずれもアメリカの津々浦々に知れ渡っているものばかり」と紹介

している。

10月13日午後9時30分のスイート・ジャズの紹介記事では「ベニ・グッドマンとその楽団がヘレン・ワードの客演で演奏する（中略）スイート・ジャズもこんなにスマートに、こんなに洗練されて来た、東京のダンス・ホールで今やっているジャズはあれは音楽博物館行、オット失礼」とベニー・グッドマンを賞賛している。

10月21日、放送ストライキが解決した場合の放送再開状況の予想記事を出している。「すぐに放送ができるものではない」としながら、「一般の芸能放送の時間にはAKが誇るレコードで埋めて行けるから夜の楽しみは充分享受出来る。ただスト中聴取者の耳が相当WVTRに馴れているからレコード番組の場合はよほど旨く組まないとWVTRに聴取者を取られる虞れがある」とWVTRをより聴くようになったことで、日本のリスナーの耳が肥えたと指摘している。

10月26日、二十日ぶりにストライキが終了するが、その後も余波がくすぶり続ける。11月10日の読者欄、「読者放送」には「放送番組は依然として面白くない、むしろ進駐軍向けの電波に大きな魅力を感じるのが現実である（中略）私はこの収穫を同じような気持ちでいる多くの聴取者に知らしむべきだと考える、放送局がこの放送を第一か第二の電波にのせ、せめて解説や紹介をしたら語学の向上はもちろん文化の向上に一層大きな力となるのではないかと思う（江戸川、K・O生）」という読者意見が掲載され、12月17日には同じ欄に「ストライキ以来WVTRの放送をきいて毎日たのしんでいますが、あれに日本語をつけて下さるわけには行かないのでしょうか（中略）あのすばらしいプログラム、せめて洋楽プロだけでも短い日本語アナウンスをつけてくださるとどんなにわたしたちは喜ぶことでしょう（本郷□町一木山勉三）」との意見が載っている。同じく12月31日にも、WVTRの放送に解説をつけてこれを、日曜の午前などの、第二放送の空き時間を利用して放送してほしいとの投書が紹介されている。たしかにこの時期新たなWVTRの日本人リスナーが増加し、英語による放送に不便を感じながらも、番組内容に満足している様子がうかがえる。

ちなみに同じ12月31日に掲載された、「NHKの放送一年間の回顧」という記事では、演劇評論家の小泉鐵が「音だけは出ていたラジオ」と結論めいた見出しを掲げ、NHKを切って捨てた。ともかくこの年の放送ストライキはすこぶる評判が悪かった。

10月22日には、戦前から評論家として著名な並河亮が「“ジャズ”と一口に申しますが…（今晩のWVTR）聴く前に知って置きましょう」と見出しをつけて五段にもおよぶ長文コラムを書いている。ラグタイムから始まったジャズの歴史が「一九二五年を中心にポール・ホワイトマンのシンフォニック・ジャズがベートーヴェンなどのクラシックと並んでメトロポリタン歌劇場で演奏され、大管弦楽によるジャズ式演奏が好評を博した、次いでホット・ジャズの技巧は更に進化し一九三三年に現れたベニ・グッドマン達のスィング・ジャズが一世を風靡する」と駆け足で振り返り、「進駐軍WVTRから放送されるジャズには丁度これ

らのすべてが演奏される」と解説している。ビバップには一言も触れていない点は当時としての日本における「ジャズ認識」がわかり興味深い。

とは言えこういったコラムが登場する背景には WVTR の放送がきっかけとなったリスナーのジャズに対する関心のたかまりがあった。12 月 20 日付の読者放送の欄にもジャズの発達史を WVTR の放送と関連させて紙上で説明してほしい、（NHK の）ラジオでもアメリカ音楽史を放送してほしいとの要望が寄せられ、当欄の係は、放送局へ引き継いだと回答している。NHK の反応も早く、1947（昭和 22）年２月 10 日のラジオ版の記事によると「近く AK でジャズ講座」との見出し及び「スィッチを一寸ひねると WVTR のにぎやかなジャズ音楽が流れてくる‥我々は長い戦争のおかげであまりにも現代世界文化の一部をなすジャズ音楽からはなれ過ぎていた」という書き出しで、戦前にあったジャズ研究会[16]が活動を再開させ、３月頃から JOAK でジャズ講座を始めると伝えている。

1947（昭和 22）年

１月 15 日から読売新聞がラジオ版に「WVTR（進駐軍放送）」という欄を設ける。

当初は番組表ではなく、「今日のききもの」と副題がつけられている。この日は「映画“ラプソデイ・イン・ブルース[17]”が来月日本で封切られようとしているがこの音楽映画の巨編を見る前にきょう WVTR の昼３･30 ポール･ホワイトマン･バンドをきいて見るのも一興」という内容である。この映画は日本公開時には「アメリカ交響楽」と題されたガーシュインの伝記映画でポール・ホワイトマン役も本人が出演して演奏した。

この時期フランク・シナトラの露出が増え、読売新聞１月 17 日では、流行歌手で昨年のダウンビート紙歌手コンクールでビング・クロスビーについで２位を獲得したこと、また同１月 24 日では「夜９･30 からアメリカの軽音楽界の彗星的存在フランク･シナトラが唄う、“声”といえばシナトラを意味するほどの人気」と謳いあげたうえで、つづけて彼の苦しかった半生に紙面を割いてくわしく紹介している。

読売新聞３月 28 日の「今日のききもの」では、午前 11 時から放送の（ナット）キング・コールのトリオが取り上げられている。キング・コール・トリオを今年のエスクワイヤのコンテストで銀賞受賞、またトリオのギタリスト、オスカー・ムーアは２年連続の金賞を獲得と紹介したうえで、「今年のアメリカ・ジャズ界の新傾向はホワイトマン式のシンフォニック・ジャズはもはや時代遅れとなり、小編成のカンボ形式がさかんになろうとしており、キング・コールやオスカー・ムーア等への期待が高まっている」とジャズの流行の変化を伝えている。

16　ジャパン・ホット・クラブ（JHC）。旧メンバーの村岡貞会長を筆頭に、AK 稲吉愈右、ヴィクター河野隆二、池上悌三、石井輝敏、BK 油井正一、野口久光等が名を連ねた。

17　映画の題名は「ラプソデイ・イン・ブルー」の間違いであろう。ちなみにこの時代の新聞、雑誌等の英語のカタカナ表記は今からは考えられない間違いや揺らぎが多数存在する。

とはいえベテラン大物ジャズメンの登場はまだまだ多い。４月９日の放送では「二人の巨人」が登場する。この日の世界日報のラジオ版見出しは「エリントンとグッドマン“二人の巨人”出演　WVTR 聴きのがせぬ豪華プロ」とあり、記事では「☆‥十二時四十五分、ジャズとジャズメンの歴史―ダウンビートの時間―（中略）きょうはジャズがニューオーリンズを漸くはなれてシカゴに移り白人バンドにジャズがわたるかと思われていた一九二〇年代に突然登場して以後のジャズ界をおさえた偉大なる黒人デューク・エリントン自作自演になる所謂ジャングルスタイルという消音器（ミュート）を使った“ブラック・エンド・タン・ファンタジイ”を演奏します。デュークは今年のエスカイヤ・ジャズ・コンテストでも編曲とバンドの二つの黄金賞を獲得しました、既に三十年近く王座に悠々座っているジャズの生きた古典です。　☆・・五時三十分、ワンナイト・スタンドにはニューヨークのレストラン四百番からベニイ・グッドマン七重奏団が“ストリング・オヴ・パール”（中略）“セントルイス・ブルース”をお聞かせします　なおグッドマンは近くソ連へ演奏旅行に立つといわれています、ダウンビートのデューク・エリントンとともに現代ジャズの正統をつぎ、かつ進めてゆくこの二人の巨人の演奏を一日のうちに聞けるのは WVTR ならではというところです」とその意義を述べている。

５月 29 日、WVTR は AFRS ５周年を記念して特別放送を編成する。その内容を同日付の世界日報から見てみる。

６時 15 分からは WVTR の GI たちのラジオ劇風の AFRS ５年間の歴史、オーストラリアからガダルカナル、ニューギニア、フィリピン、沖縄、そして東京にいたる、戦争より平和への歴史がしゃれた形で綴られ、続いて７時からはバースデイ・ショウ。５年間のヒットソングとジャズによる回顧で、放送中突如東京湾に怪獣が現れ急襲、とのニュースがはいるが、実は怪獣は AFRS の誕生日のあいさつにやってきた―という趣向、音楽とスリルあるコメディを織り交ぜたアメリカらしいラジオ・プレイで出演者は全員 WVTR の GI だと、「ネタバレ」の番組告知をしている。

９時からはビング・クロスビー、９時 30 分はベニー・グッドマン。これらの番組とは別に放送会館スタジオでは記念パーティーが催され、これには日本のスイングバンドの中より選ばれた、渡辺弘指揮のスターダスターズ[18] が出演、10 時 15 分から 15 分間放送された。読売新聞のラジオ版ではスターダスターズの出演告知を「10・15 東京の日本人バンドの No 1 スターダスターズの懸命の演奏」（下線：筆者）と報じている。

また４月３日には「戦後大衆の求める半クラシック音楽として（読売新聞）」エデイ・デユー

18　専属歌手には三根徳一（ディック・ミネ）、石井好子、ティーブ・釜萢（かまやつひろしの父）ナンシー梅木、ペギー葉山、笈田敏夫等、プレーヤーとしては中沢寿士、南里文雄（ホット・ペッパーズ）、多忠修（ゲイ・スターズ）、谷口安彦（スイング・プレミア）、杉原泰蔵（スイング東京）等がいた。踊る指揮者として一時代を築き、後のスマイリー小原の先駆けとなった。第一ホテルをメインにラジオ、映画、ジャズコンサート等に活躍を続け、戦後日本のジャズ復興の大きな原動力となった。

チン編曲指揮による「世界名曲集」、４月８日にはカルメン・カバルラロ(ママ) によるラフマニノフ「ピアノ協奏曲第三楽章」が演奏されており、世界日報は米国でカバルラロ（キャバレロ）のラフマニノフ（のレコード）がよく売れている現状もあわせて伝えている。ほかにも７月 28 日付世界日報によると「トミー・ドーシー楽団がワルツ王ヨハン・ストラウスのワルツ曲を四つ手際よく編曲したものをおきかせします、商業放送の典型とも云うべきものですが、充分にたのしめることはうけあいです」と辛口に紹介している。

こうした「クラシック曲のスウィング化」は 1930 年代後半から 1940 年代初頭のスウィングの全盛期を通じて特徴的で、トミー・ドーシーによるストラウス楽曲はその先駆けとなった代表例である。当初米国ではクラシック曲をけがすものとして批判をうけるが、結果的には大衆に支持され曲はヒットしていく（ストウ、1999、133-139)。日本でも、戦前戦中からこの種の音楽は存在し、NHK を通じてこうした啓蒙教化的な「軽音楽」観に馴らされていた日本人リスナーは、WVTR から流れるクラシック曲のジャズ編曲をすんなり受け入れ、クラシック曲をけがすものと捉えるのではなく、スウィング・ジャズを「高級音楽」として受容する方向に向かう（輪島、2023、186-187)。

また読売新聞によると、７月３日午後８時の「ビング・クロスビーの時間」にスパイク・ジョーンズとシティ・スリッカーズがゲスト出演している。スパイク・ジョーンズは、フライパンやサイレン、カウベルなどの道具を使用し、「ウィリアム・テル序曲」など古今の有名曲をコミカルに演奏して人気を得たが、この当時マニラ・ボーイズというジャズバンドにいたフランキー堺が WVTR を聴いてスパイク・ジョーンズに感化され、バンド仲間にカウベルやサイレンを持たせて演奏していた。のちに自らバンドを結成して、シティ・スリッカーズと命名する（青木、2013、248-249)。

1948（昭和 23）年

この年の『音楽の友　四月号』にクラシック音楽が専門の音楽評論家の富樫康が「WVTR スタジオ紹介」と題して曜日別に WVTR の番組を紹介している[19]。1948 年時点での主な番組の編成を抜粋してみていきたい。

日曜 0900　日曜礼拝　1130 ジルの音楽箱　1215 世界の音楽（世界各国の地方性を持った音楽）1430 星の収穫（歌と管弦楽で通俗名曲をやる）
月曜 1245　ダウンビート（ジャズとジャズメンの歴史、ジャズ通にとって貴重な時間）
火曜 1530　コンサートホール（司会ライオネル・バリモア NBC 交響楽団他極上楽団）

19　富樫康は 1946（昭和 21）年 12 月 11 日に世界日報の読者放送欄に実名、実住所で身分も音楽評論家と名乗ったうえで投書をし、現在優秀な交響楽演奏会を聞くことの出来ない日本国民のために、プログラムの曲目、楽団、指揮者、独奏者、新作情報などをなるべく詳細に記してほしいと要望している。

1930　私達の愛する音楽（名曲ヒットソング、通俗歌曲等）
水曜 1330　南米音楽珠玉集　1900 ハリウッドボール交響楽演奏会（最も豪華な音楽会、常任指揮ストコフスキー、人気演奏家が毎回出演）
木曜 1530　ジュビリー（米国の最近のジャズの傾向がわかる曲目）
金曜 1245　ダウンビート　1330 ジャズの精華集　1530 話の泉
土曜 1500　世界の交響楽（米国各地の交響楽団が順次登場）
毎日 2245　パイプオルガンでラヴェルの「逝ける（ママ）王女のためのパヴァーヌ」が奏でられ、「音楽とともにある言葉」（詩の朗読）をもって 2300 に国歌とともに一日の放送終了

１分の休みもない放送で大部分がジャズ音楽だが、クーセヴィツキー（73 歳）のボストン交響楽団、ワルター（73 歳）のニューヨーク・フィルハーモニー楽団、トスカニーニ（80 歳）の NBC 交響楽団、オーマンディのフィラデルフィア管絃楽団等が度々登場するとまとめている［音楽の友、1948、28-29、指揮者の年齢付記および楽団名称は原文のまま］。

次に軽音楽に目を転じ、ジャズ専門誌「エスクワイア」や「ダウンビート」で評価され、WVTR によく登場するジャズ・アーティストとして以下の面々を取り上げ紹介している。その順番のまま挙げると、ポール・ホワイトマン、デューク・エリントン、ルイ・アームストロング、ベニー・グッドマン、ウディ・ハーマン、アーティー・ショウ、ハリー・ジェームス、トミー・ドーシー、エリオット・ローレンスという顔ぶれである。

またポピュラー・シンガーとして、ビング・クロスビー、フランク・シナトラ、ペリー・コモ、ダイナ・ショア、ジョー・スタッフォード、ジニー・シムスと並べ、最後にブルースの女王としてビリー・ホリディを挙げ、「批評家は彼女は生きている女性ジャズシンガー中の最高であると太鼓判を捺した」と締めくくっている（音楽の友、1948、29-31）。

AFRS の音楽番組の中には、ディスクジョッキー番組と呼びうる放送形式の、注目すべき番組が存在した。

1948（昭和 23）年 12 月 10 日、「ジルの音楽箱／ジルのジュークボックス」（Jill's All Time Jukebox）という番組が放送二千回記念特集を２日にわたって放送している（読売新聞）。GI ジルというのは、AFRS の人気ディスク･ジョッキーで世界日報（1947.８.９）は「おなじみのジル嬢のデイスク・ジョッケイ、デイスクはレコード、ジョッケイは競馬の騎手、この二つのことばを組み合わせたアメリカ語で、おしゃべりをしながら様々なレコードをアレンジして聞かせるという簡単なようでいて恐らく頭と舌のいる仕事です、ジル嬢は GI ジャイヴのジョッケイ、ジルズ・ジュークボックスのジョッケイもやるという風に AFRS の放送網では大もてです、優しい声が GI に好まれるものでしょう」と解説している。

GI ジルはいわゆる芸名で解説にもあるように AFRS の複数番組を担当していた。「ジル

の音楽箱」は通常週５日放送するいわゆるベルト番組だが、この時期に放送二千回を迎えるということは、1942年の開局直後から放送が始まった計算になる。つまり戦場で放送の態勢が整うやいなや、南太平洋の「ジャングル･ネットワーク」に持ち込まれた最初期のブロードキャスト・トランスクリプションに録音されていた番組と考えられる。米軍兵士はジルの声に励まされて太平洋を西へ北へと進軍し日本でまた彼女の声に触れていることになる。

また注目すべきは、日本の新聞が「ディスク・ジョッキー」という言葉を語源から説明していることから、この時期に明確な形でディスク・ジョッキー番組の存在が確認できることである。本稿の３－２で述べたように、当時の米国のラジオは、人気のダンス・バンドによる、全米各地の大規模なダンス･ホールや高級ホテルからの実況ナマ中継放送が主流で、ローカル局がやむを得ずレコードを用いて音楽番組を制作する場合、疑似的アナウンスやインタビューなどを挿入して、実況生放送に似た雰囲気作りを工夫するといった、ラジオ番組に対する美学的判断が濃厚だった（ピーターソン、2006、145-146）。そういった時代背景を考えると、「ジルの音楽箱」は軍隊の放送とはいえ、ネットワーク・ラジオの規模に匹敵するAFRSという主要ラジオ局において、本格的にディスク・ジョッキー形式に取り組んだ最初期の番組と考えられると同時に、米軍の放送ではあるが、日本で放送された最初の本格的ディスク・ジョッキー番組と言えるかもしれない[20]。

ちなみに世界日報の1947（昭和22）年９月21日付のラジオ版で「ジルの音楽箱」の放送曲目の解説を見てみる。

> 現代アメリカンの標準型ともいうべきビッグ・ネーム・バンドばかりで、それに曲目もすべてスタンダード、
>
> (1) トミー・ドーシー楽団が“ゲティン・センティメンタル”　(2) デューク・エリントン楽団“テイク・ジ･Aトレイン”　(3) ハリー・ジェームス楽団“シリビリ・ビン”　(4) テックス・ベネキとグレン・ミラー・バンドの“ムーンライト・セレナーデ”　(5) カウント・ベイシー楽団“ワン・オクロック・ジャムプ”　(6) アーティ・ショウ“ナイト・メーア”　(7) ジミイ・ドーシー楽団“コントラスツ”　(8) スタン・ケントン楽団“アーティストリイ・イン・リズム”
>
> いずれも各々特色をもった楽器編成と音色をもって全米の老幼男女にひろく愛されているバンドです、アメリカのジャズ音楽を語るにも聞くにも先ずこの程度の楽団の名とアレンジの在り方を心得て終えばジャズ入門ずみと云えよう

20　NHKでも戦前から特にクラシック音楽を中心にレコードをかける番組は存在したが、番組として工夫されたものではなかったようである。一例として世界日報（1947.1.28）の「ラジオ短評　放送への注文　音楽的良心」と題されたコラムから抜粋する。英会話の時間が休講となりレコードの時間になったが、「歌のレコードの次にはこれと何の関係もない管弦楽が送られ、しかもそれが片面終わると、次にはその続きが送られず全然無関係のものが送られる始末」、「演奏の途中で時間がきたとて、ポツンと放送を中断してしまうことも凡そ不快なことだ」

全曲バンドのテーマ曲ないし十八番で、実演ではなくレコードをかけることで容易にヒット曲づくし、しかもオリジナル演奏による曲目構成が可能になることをよく示している。こうしてシングル盤の登場やヒット曲がインストロメンタルからボーカル主体となっていく流れと相俟って、放送のポピュラー音楽史上においてはディスク・ジョッキー形式によるベスト・ヒット番組が今後主流を形成していくことになる。

4　米軍放送の影響力

4－1　米軍放送の日本における認知度

日本独立後のFENが基本的には在日米軍基地周辺をカバーするだけだったのにくらべて、占領期のAFRSはほぼ日本全国の都市部をカバーしていた。そのうえAFRSは、そもそも日本の放送メディアがNHKの２波しか存在しない段階での第三波であった。この二点だけとってもAFRSは現在の多メディア時代の感覚では考えられない存在感を持っていたと思われる。

また戦前からNHKが培った街頭放送の伝統[21]が戦後も続いており、街中にラジオ放送が流れるという風景が日常の生活にあった。街中の電気店の店頭でも世間に向けてラジオの放送を流していたようだが、1949（昭和24）年の電気店向けの情報誌に「近頃、よく、第三放送をかけて街頭にスピーカーを向けている店が多くなった」（ナショナルショップ、1949-７、29）との記事がみられる。あるいは林芙美子の1948（昭和23）年を舞台にした小説では「新宿駅のホームに一人で立っていた。スピーカーからWVTRのジャズ音楽が流れていた（林、1959、232）」という光景が描かれている。

ここから想起されるのは、民間のFMラジオ局が続々と開局した1970年代以降のFM放送である。当時、主として洋楽とよばれたポピュラー音楽をBGMとする目的で小売店や飲食店がFMラジオを店内や店周辺に流していたが、WVTRをはじめ米軍放送には少なくとも70年代以降のFM放送並みの認知度はあったものとおもわれる。ちなみにNHKのFM放送は開局当時「第三放送」と呼ばれていた（恩蔵、2009、14）。

4－2　日本人リスナー各層の反響

活字になっている占領期の雑誌など出版物はもちろん、その後年月がたってからの回想等でもWVTRや、関西ならばWVTQに関する言説は多数存在する。音楽に限らず、全般的な日本人の感想としては、繰り返し述べてきたように、米軍放送は「笑いの多い、明るく楽しい放送」であったということである。前述の電気店向けの情報誌には「WVTRには、日

21　戦前、NHKは全国各地の街中に放送を拡声器で流すラジオ塔を400箇所以上設けた。（岡部匡伸、2020、103）

本（の NHK：筆者補足）のようなお説教が少なく、たえず音楽や娯楽放送が多く、一日中賑やかである（ナショナルショップ、1949-７、29]」との記述も見られる。

NHK アナウンサー藤倉修一も「WVTR の放送をきいていると、実に笑いが多い。まず、アナウンサーが軽い冗談を交えて笑いながら出演者の紹介をすると、出演者もまた負けずにおどけた挨拶を送って観衆や聴取者をちょっと笑わせてから演奏なり独唱なりを始める。観客にいたってはまるで演出でもされている様によく笑う（藤倉、1948、32-33)」と述べている。

世界日報 1946（昭和 21）12 月 11 日付コラム「明るい進駐軍放送」においても元朝日新聞記者でジャーナリストの成澤玲川が以下のように述べている。

> 放送ゼネスト中は WVTR の進駐軍の放送しか聴けなくなってしまったが、言葉がわからなくても日本人にアメリカ人の放送を味わわせる絶好の機会だとおもった。
>
> 朝のニュースからはじまってライズ・アンド・シャインのあの親切なアナウンス―さあ起きる時間ですよ、天気は素晴らしいとか朝飯はできているとか、シガレットやコーヒーをすすめるあの和やかな調子―これが占領軍兵舎の中にひびくラジオの声だとおもうと、ピンタやあらゆる愚劣な蛮行が公然と行われていた日本の軍隊、それを口惜しがりながら問題にもし得なかった日本の民衆との距離があまりに違うのに今更ながら一驚を吃する。（中略）朝から夜遅くまで、よくあれだけ笑う材料があるものだと感心する。アメリカ人はジョークを好む。アメリカン・ジョークはジャズ音楽と共にアメリカ放送の一面を代表している。

言葉が違っていても感情は素直に他国の人間にも伝わるのであろう。まして自国のラジオがユーモアやウィットと無縁の国民教化型の放送であったならば、なおさら WVTR の「笑い」が際立ったと考えられる。

日本人ミュージシャンが影響を受けた例としてフランキー堺は本稿の３－３で前述したが、渡辺貞夫も「WVTR にダイヤルを合わせると、真空管のラジオから流れてきたのはジャズをはじめ、それまで聴いたことのない自由なスタイルの音楽だった。僕は一遍で魅了された。(時の動き、1996-１、64)」と述懐している。結果渡辺はクラリネットを父親にねだり、ベニー・グッドマンの真似を始める。

また当時すでにトップスターだった越路吹雪は「ラジオはたいてい WVTQ をきいて、アメリカの唄い方の妙味を掴みたいと苦心いたしています（あおぞら、1950-２、35)」と述べている。

作曲家の服部良一は、「ブギ（ウギ)」は「ことに終戦後は WVTR で大分日本人の耳に（米国音楽のリズムが：筆者補足）耳なれてきていたので、これなら大衆にも唄えないことはな

いと考えた（文芸公論、1949-10、62）」と述べ、WVTRの影響力が大きいことを認識している。

また音楽評論家では、瀬川昌久が「この戦後10年間に若き日の青春時代を送った人なら誰でもよく憶えているはずだ。進駐軍放送（WVTR）の毎週日曜夜に流された『ユアー・ヒット・パレード』の時間を。ここで毎週発表されるヒット・パレード・ソングの順位一つ一つに、一喜一憂して、自分の好みの歌のメロディーと英語歌詞を、必死で覚えたり書き取ったりした学生がいかに多かったか。（スイングジャーナル、1976-１、302）」と代表的な人気番組を挙げて思い出を語っている。

吉田秀和はその当時の評論において、取り上げる音楽家の演奏については、たいてい WVTRを通して最新演奏に接していることを但し書きしている（フィルハーモニー、1950-３、６-７）。

また湯川れい子は「WVTRをつけっぱなしにして、好きな曲がかかったら、一行でも二行でも歌詞を書き取ろうとしました（こども未来、1996-９、33）」と当時を回想している。

湯川れい子だけではなく、広く英語を学ぼうとする学生、受験生などにも WVTRが大きな影響を与えたことは、本論のここまでで取り上げた引用資料に英語学習雑誌が数々含まれていたことからも明らかで、その典型としてここでは、1953（昭和28）年度成蹊大学の英作文の入試問題を挙げる。「私はラジオの WVTRを半年聴いているが、始めは一寸も判らなかったが、今では少し判るようになった」（石橋、1953、69）

本論冒頭で引いた三木鶏郎は、『日曜娯楽版』にたずさわっていた頃に書いたエッセーの中で「WVTRの畳みかけて来るテンポの早い切れ味の良さはNHKの何処にも見当らない。同じラジオをやるなら今までにないホットスタイルでホットの材料を掴みたい（三木、1949、220）」と心情を吐露している。この後三木鶏郎はNHKから民間放送に転じ、コマーシャルソングという新しい分野で不世出の活躍をするが[22]、WVTRは、キャリアの最初期から彼にとって揺るぎない手本であり目標であった。

このように放送業界はもちろんのこと、音楽の世界でもミュージシャン、作曲家、評論家等、様々なジャンルの日本人がWVTRから影響を受けた。また英語がわからないながらも、その笑いの絶えない楽しげな放送に多くの一般の日本人リスナーも WVTRに魅了されたのである。

5　おわりに

1950（昭和25）年６月に朝鮮戦争が勃発する。その10月からはWVTRで「リラックス・

22　戦後の放送音楽の分野における三木鶏郎の業績については【輪島裕介 2011】に詳しい。

アンド・リッスン・ホスピタル・リクエスト」という番組が始まり（読売新聞 1950.10.３）、翌年４月からはベルト編成される（同 1951.４.３）。番組内容の詳細は不明だが、おそらくは増え続ける前線から日本の病院へ送り返される傷病兵に対する慰安番組とおもわれる。

このように米軍放送はその成り立ちから、あくまでも米軍兵士のための放送であったが、ここまで見てきたように、その放送を自然に聞けてしまう多くの日本人に大きな影響を与えた。この構図は日本だけに留まらず、AFRS は朝鮮半島や、以後冷戦が本格化するなかでドイツをはじめ西欧諸国など世界各地に音楽を媒介として米国文化を拡散し、親米感情の良化に寄与するなど世界規模で影響力を発揮する。まさに「アメリカ軍のいるところ世界の人々は同じ放送を聞いている（世界日報 1946.10.21）」のである [23]。

そして朝鮮戦争と並行して日本独立への議論も深まり [24]、併せて民間放送局設立の動きも本格化する。

1946（昭和 21）年の NHK の放送ストライキのあと、世界日報に多くの投書が寄せられたことはさきに本稿の３－３で述べたが、読者、すなわちラジオのリスナーが思い、望んだことは、要するに「NHK は面白くない。一方 WVTR は大変魅力的である。よって WVTR のような楽しい放送をぜひ日本語でやってほしい」とまとめることができるだろう。民間放送ラジオ開局の動きが伝えられた時、NHK とは違う、新たな日本語のラジオ局ができることを一般の人々が諸手を挙げて歓迎したことは想像に難くない。NHK という反面教師だけではなく、WVTR という理想モデルがあったことが民間放送開局の動きをより後押ししたのではないかとおもえるのである。

1951（昭和 26）年 12 月、東京地区で最初に開局した民間放送のラジオ東京（現 TBS）は、開局当初十分なレコードがそろっておらず、WVTR が大量の V ディスクを廃棄処分すると聞きつけ、払い下げてもらい放送に使用した（新・調査情報、1998-７、85）。まさに WVTR からいわば「のれん分け」でラジオ東京の音楽部門はスタートし、その後の「L 盤アワー」など、最新の米国音楽をレコードで紹介する番組に繋がっていったと思われる。

この 1951（昭和 26）年には９月に名古屋の中部日本放送と大阪の新日本放送（現毎日放送）、11 月に大阪、朝日放送、12 月には福岡、ラジオ九州（現 RKB 毎日放送）、ラジオ京都（現 KBS 京都）そしてラジオ東京と、日本のリスナーが待望した「NHK とは違う、楽しい、日本語のラジオ局」が次々に誕生し、「放送と音楽」は民間放送と共に新たな時代を迎えることになるのである。

23　海外の研究も踏まえての米軍放送の世界規模での実態や戦略の解明については今後の課題としたい。

24　1952（昭和 27）年４月、サンフランシスコ講和条約の発効に伴い、AFRS はあらたに FEN（Far East Network）に改編（井川、2014、181-182）、1953（昭和 28）年８月１日に FEN の本部は NHK 放送会館から在日米軍基地キャンプ・ドレイク（朝霞基地）へ移転する（青木、2013、369）。FEN に改編後の経緯の概略は【佐藤知恭 1968】を参照のこと。

参考文献

青木深、2013、『めぐりあうものたちの群像　戦後日本の米軍基地と音楽』、大月書店。
ジェラット、ローランド、石坂範一郎訳、1981、『レコードの歴史　エディソンからビートルズまで』、音楽之友社。
細川周平、2003、「歌う民主主義―『のど自慢』と陳腐さの効用」、東谷護編『ポピュラー音楽へのまなざし』、勁草書房。
井川充雄、2014、「コラム　米軍放送　占領期の WVTR」、難波功士編『米軍基地文化：叢書戦争が生みだす社会／関西学院大学先端社会研究所［編］，３』、新曜社。
君塚洋一、2018、『選曲の社会史―「洋楽かぶれ」の系譜』、日本評論社。
三井徹、2018、『戦後洋楽ポピュラー史　1945-1975　資料が語る受容熱』、NTT 出版。
三井徹・北中正和・藤田正・脇谷浩昭編、2000、『クロニクル　20 世紀のポピュラー音楽』、平凡社。
モラスキー、マイク、2005、『戦後日本のジャズ文化―映画・文学・アングラ』、青土社。
日本放送協会編、1965、『日本放送史　上巻』、日本放送出版協会。
岡部匡伸、2020、『ラジオの技術・産業の百年史―大衆メディアの誕生と変遷』、勉誠出版。
恩蔵茂、2009、『FM 雑誌と僕らの 80 年代 「FM ステーション」青春記』、河出書房新社。
ピーターソン、リチャード、川島漸・山田晴通訳、2006、「なぜ、1955 年だったのか？：ロック音楽の出現を解き明かす」、『人文自然科学論集 122』、東京経済大学人文自然科学研究会。
佐藤知恭、1968、「知られざる放送―FEN の歴史と現状」、『総合ジャーナリズム研究』。
ストウ、デーヴィッド・W、湯川新訳、1999、『スウィング ビッグバンドのジャズとアメリカの文化』、法政大学出版会。
竹前栄治・中村隆英監修、1997、『GHQ 日本占領史 18 ラジオ放送』、日本図書センター。
寺西厚史、2023、「昭和初年のラジオにおける放送種目としての「歌謡曲」の成立過程」、『阪大音楽学報　第 19 号』、大阪大学文学部・大学院人文学研究科　音楽学研究室。
東谷護、2005、『進駐軍クラブから歌謡曲へ　戦後ポピュラー音楽の黎明期』、みすず書房。
塚田修一、2021、「米軍基地文化としての米軍ラジオ放送 FEN：音楽関係者の聴取経験と実践を中心に」、『三田社会学 No.26』。
輪島裕介、2011、「戦後放送音楽の『ホームソング』志向と三木鶏郎」、『待兼山論叢．美術篇．45、１-27』。
――――、2023、『昭和ブギウギ　笠置シヅ子と服部良一のリズム音曲』、NHK 出版新書。
山本武利編者代表、2009、『占領期雑誌資料大系　大衆文化編３　アメリカへの憧憬』、岩波書店。

資料

Pacific Stars & Stripes	国立国会図書館
世界日報	東京大学情報学環付属社会情報研究資料センター
読売新聞	ヨミダス歴史館
東京毎日新聞	毎日新聞マイ索
大阪毎日新聞（1945-）	大阪大学総合図書館
東京・大阪朝日新聞	朝日新聞クロスサーチ
（番組）確定表	NHK 放送博物館

国立国会図書館デジタルコレクション

あおぞら、1950-２、「越路吹雪さんのプロフイル　平井房人」、広島図書。
文芸公論、1949-10、「服部良一　ブギ雑感」、丹頂書房。
フィルハーモニー、1950-３、「吉田秀和 ベートーヴェンと現代の音楽界」、日本交響楽団。
藤倉修一、1948、『マイク余談』、隆文堂。
林芙美子、1959、「茶色の眼」『現代長編小説全集第 37（吉屋信子、林芙美子集）』、講談社。
石橋幸太郎編、1953、『最新英語問題精選：大学入試訂』、泰文堂。
石原裕市郎、1949、「AFRS をきく」『カムカムクラブ』２（５）メトロ出版社。
磯部佑一郎、1949-９、「WVTR を聴く」『The Youth's Companion』日本英語教育協会。
科学朝日、1947-７、「WVTR の放送機構」朝日新聞社。
こども未来、1996-９、「ホッ！とインタビュー　湯川れい子さん」、こども未来財団。
三木鶏郎、1949、『冗談党宣言』、実業之日本社。
————、1954、『冗談十年　上巻』、駿河台書房。
ナショナルショップ、1949-７、「ラジオをかこんで　店頭の話題縮刷版」、ナショナルショップ出版社。
日本放送協会編、1947、『NHK 年鑑　昭和 22 年版（昭和 17 年４月-21 年３月）』。
日本民間放送連盟制作、1975、ラジオ特別番組『戦後三十年　日本人を育てた歌』台本。
音楽芸術、1946-10、「松本太郎　海外音楽情報　WVTR 東京の交響曲放送」。
音楽の友、1948-４、「富樫康、WVTR スタジオ紹介」。
青春と読書 26（９）（177）、1991-９「堀田善衛氏に訊く　めぐりあいし人びと」集英社。
占領軍調達史編さん委員会編、1955、『占領軍調達史［第２］』、調達庁総務部総務課。
新・調査情報 PASSING TIME、1998-７、「ラジオ・グラフィティー『イングリッシュ・アワー』小谷章」、TBS メディア総合研究所、東京放送。
スイングジャーナル、1976-１、「瀬川昌久　戦後日本のジャズ史（７）」。
時の動き、1996-１、「子どもたちに『音を楽しむ』音楽教育を」、内閣府篇　国立印刷局。

Web 資料

宇尾博介「進駐軍放送物語」2023/ 6 /23 閲覧
【oldradio-net】進駐軍放送物語 WVTR&FEN（転載）：HamRadio blog（asablo.jp）
まえさきひろし「AFRS 進駐軍放送」2023/ 9 / 2 閲覧
History of Citizens Band Radio - AFRS 進駐軍放送（google.com）
京滋ミーティング「敗戦前後の NHK 放送の周波数変更」2023/11/17 閲覧
敗戦前後の NHK 放送の周波数変更（ooco.jp）

音源

『GOLDEN RADIO YEARS ON CD』（1－3）アポロン・ミュージック 1988
＊ブロードキャスト・トランスクリプションから CD に復刻
『V ディスクオン CD』（1－7）アポロン・ミュージック 1988
＊ V ディスクを SP に復刻したものを CD 化

The Days of “Radio 3”: The AFRS/WVTR’s Music Programs and Their Influence on Occupation-era Japan

TERANISHI Atsushi

This paper examines the ways in which the AFRS （Armed Forces Radio Service), during the era of occupied Japan, not only exerted a great influence on the Japanese broadcasting and music industry, but also on the general public, thus facilitating the acceptance of American music and the birth of commercial broadcasting in the country.

AFRS, established in 1942 to entertain U.S. soldiers, continuously to expanded alongside the U.S. front lines. After Japan’s surrender, the U.S. forces claimed a number of strategic facilities, amongst them much of the Japan Broadcasting Corporation’s infrastructure -including the airwaves of Radio 2- and began radio broadcasting as WVTR on September 23th, 1945.

Aired contents included news, music, & live commentary, and heavily relied on recordings airlifted from the AFRS’ headquarters in Los Angeles.

Regarding classical music, the WVTR would frequently broadcast orchestras, which then were in high demand in the United States. Furthermore, popular music programs featuring leading swing jazz bands such as Benny Goodman and Harry James were broadcast in their original versions on the WVTR.

Many statements attest to the considerable influences of the WVTR’s at that time. Not only did it shape the broadcasting world, musicians, composers, critics, but even students wanting to learn English would be brushed by its impact.

In addition, even amongst the ordinary Japanese -many of them who they did not understand English-people were fascinated by the joyful broadcast full of laughter. It appears that it were those who found the NHK too stiff, afterwards began to further a movement to launch commercial broadcasting in Japan. Thus from 1951 onwards, a succession of “fun” and “different” Japanese radio stations were established, which marked the new era for domestic broadcast and popular music.